

平成29年度大仙市仙北地域の未来を語る会報告書

1. 日時：平成29年11月23日（木） 14：30～17：20
2. 会場：グリーンパレス竹馬
3. 出席委員（9名）
大釜 滝浩 大河 奈々子 後藤 孝子 小松 郁子 佐藤 あや子
中村 健秀 藤原 稔 森元 通友 吉田 利雄
4. 来賓（5名）
大仙市副市長 佐藤 芳彦 大仙市議会議員 大山 利吉
大仙市議会議員 佐藤 隆盛 大仙市議会議員 本間 輝男
池田家16代当主 池田 泰久 池田家顕彰会会長 伊藤 稔
JA秋田おばこ組合長 原 喜孝
5. 大仙市仙北地域市民・大仙市職員（47名）
6. 内容
14：30 開会（総合司会：中村健秀副会長）
14：31 主催者あいさつ（吉田利雄会長）
14：34 来賓あいさつ（佐藤芳彦副市長・大山利吉議員）
14：40 来賓紹介
（佐藤隆盛議員、本間輝男議員、池田泰久氏、伊藤稔氏、原喜孝氏）
14：50 仙北中学校の生徒発表
「ずっと住みたい！せんぼく地域に」
発表者：仙北中学校2年 伊藤翔哉さん
同 富樫由侑さん
同 伊藤香音さん
15：30 グループ別意見交換
・3つのテーマを設定し、1テーマを2～3グループが話し合い、全部で7グループに分かれて意見交換を行った。
16：30 グループ別意見交換の報告、全体での意見交換
・1グループごとに発表し、最後に来賓、主催者からの意見発表とまとめを行った。
17：20 第2部情報交換会（懇親会・食事会）

7. 生徒発表

(1) 地域とのつながりを実感できた避難所開設訓練

- 昨年10月21日、朝晩の冷え込みが厳しくなった頃、仙北中学校を会場にした避難所開設訓練が行われた。
- そのねらいは大きく3つあり、1つ目は、災害時の避難所開設にあたり、私たち生徒が、教職員、市職員、地域住民と一体となって避難所運営を行うこと。
- 2つ目は、避難所運営に係わる役割分担や協力・支援等の方法を学ぶこと。
- 3つ目は地域の一員である中学生が自分の役割を自覚し主体的に避難所運営に参画すること。
- 避難所開設に向けて、3回の事前学習会を行い、10月21日の本番に備えた。
- まずは、夏休み中に地域の赤十字婦人部の方から協力をいただき、先生方と生徒会執行部が参加し、炊き出し体験学習会を行った。利便性と衛生面を考慮し、レトルトカレーを準備した。少ない水でご飯を炊く簡易炊飯のやり方や、身近にある新聞紙とビニール袋を用いた食器の作り方などを教えていただいた。
- 10月上旬、大仙市役所総合防災課の方々に来ていただき、2回目の事前学習会を行った。仙北地区に想定される災害について説明をしていただき、災害時に自宅から近所の避難所までのルート確認、地区ごとのハザードマップ作成などを行った。
- 仙北地区は大きな災害は起きにくいですが、生活道路が細かく入り組んでいるため、災害時に孤立してしまう住民が出る可能性が高いこと、また、近隣の住民同士で日頃からコミュニケーションをとり、共助の意識をもつことの大切さを知った。
- 避難所開設本番の1週間前、地域住民の受け入れを想定した3回目の事前学習会を行った。
- テント設営や避難ブース作成は、作業の手順やコツを覚えるのに苦労したが、テント設営になれている運動部員や、ものづくりが得意な造形部員が先頭にたって作業を進めるなど、次第に生徒が自ら活動する姿があらわれ見え始めた。
- 地域住民受け入れのシミュレーションも行い、役割分担の仕方や、受付コーナーの仕分けや表示を工夫し、地域の方が分かりやすく移動できるように気を配った。
- 食器作成班や炊き出し班も赤十字婦人部の方の指導をいただきながら衛生面、安全面に気を付け準備を進めた。
- 避難所の中核となる生徒会本部では、どんな動き、どんなリーダーシップが必要か、執行部全員で知恵を出し合った。避難してきた地域住民の方のためにどんな事ができるのか、何が必要になるのか、一人一人真剣に考え準備を進めた。
- 10月21日の訓練は、わずか4時間の訓練だが、学ぶことがたくさんあった。
- 避難所開設訓練当日を迎え、午前9時、地震発生の放送がかかり、生徒は真剣にシェイクアウト、グラウンドへの避難、リラクゼーションに取り組んだ。

- そして避難所を求めてやってくる地域住民の受け入れ準備に「私やります精神」全開で取り組むことになった。
- 生徒会本部では各セクションへの指示と情報収集、避難者名簿の作成や避難ブースの割り振り、全体の見回りや諸問題への対応など、避難所の中核としての機能を果たした。
- 当日は気温が低く、風も強かったため、急遽、毛布を配付したり、足の悪いお年寄りのために椅子を準備したり、乳児をつれたお母さんのために授乳スペースを作ったりもした。
- 事前学習のおかげで、パーテーション作成もテント設営もスムーズに進んだ。
- どんな風にサポートすればお互いに作業しやすいか、ということも理解して作業を進められた。
- 避難者受付コーナーでは、地域別に受付場所を分け、係が誘導し避難者がスムーズに避難ブースに移動できるように心を配った。
- はじめは緊張していた係員も、次第に自分から住民のかたに声をかけられるようになった。また、実際に受付をしてみても新たに必要になる表示や役割などにも気付くことができた。
- 炊事準備班では約350食の昼食を準備した。ある程度の準備が整った中での炊事ですら大変なのに、実際に災害が起きた場合はもっと混乱したものになり、一人ひとりの判断力と互いの協力が必要になると感じた。
- 避難所のあちらこちらでほほえましいふれあいもあり、一緒に和やかにおしゃべりしながら食器作成をしたり、固いアスファルトに座るお年寄りの肩をもんだりするなど、温かいふれあいがあった。
- 普段、私たち仙北中生の学校生活を支えてくださっている地域の方々に感謝の気持ちを表すことができた。
- 毛布の配付や、授乳やおむつ交換ができる女性用多目的スペースも生徒会本部のアイデアで設置することができた。
- 事前学習から避難所開設訓練当日までの取り組みを通して、3つのねらいをどの生徒も達成できたと思う。
- 一人ひとりの「私やります精神」が集結し、初めての避難所開設訓練を大きな学びのあるものにでき、さらには地域の方とのつながりの大切さと、私たち中学生の使命にも気付くことができた意味のある訓練となった。

(2) ずっと住みたい！せんぼく地域に

- ・今年60周年を迎えた仙北中学校は、10月21日記念事業式典を行った。
- ・60年の間に7,654名の卒業生を送り出し、現在の生徒数165名で活動している。
- ・全校生徒を対象にふるさと仙北についていくつか聞いてみた。
 - ①仙北地域のよいところはどんなところか。
 - ②仙北地域の悪いところはどんなところか？
 - ③10年後、20年後あなたは仙北に住み続けたいと思うか？
- ・仙北中学生が考えた仙北地域の良いところは
 - ①自然が豊か「田んぼのある風景が落ち着く、空気がきれい」など
 - ②人が優しい
 - ③地域の人が明るい「挨拶をすると返してくれる」など
 - ④伝統をつなげる取り組みがある「天筆や彩夏せんぼくでの平安行列」など
 - ⑤文化財がいっぱい「払田柵跡、旧池田氏庭園」など
- ・仙北中学生が感じる仙北地域の悪いところは
 - ①ゴミのポイ捨てが多い「ペットボトルやタバコ」など
 - ②道が暗い、カーブミラーの設置場所が少ない
 - ③車の運転が荒い、怖い、事故が多い
 - ④働くところが少ない、少子高齢化
 - ⑤いい店がない、遊ぶ場所がない
- ・ふるさとに住み続けたいかとの間に、約4割が「思う」で、理由は「自然が豊か」「空気がおいしい」「生まれた秋田に住みたい」「思い出深い場所」「史跡の良さを感じる」「地域の発展に貢献したい」「他の場所は考えられない」などがあつた。
- ・「迷う」も4割で、理由は「思い出はあるけれど」「働くなら都会がいい」「なりたい職業に就けないかもしれない」「都会に憧れる」「夢の実現に厳しいかもしれない」「大きな収入を得るために県外に行かなければならない」「視野を広げたい」などがあつた。
- ・「思わない」が2割で、「行きたい会社がある」「秋田にはない物を知り体験したい」「夢をかなえるにはちょっと」「社会が進んでいる」「都会に住み働きたい、賃金が低い」などがあつた
- ・これらから、住みたいけど夢の実現を思ったり、広く世界を見たいという思いがあることがわかる。
- ・秋田にはないことをしたい人や県外に出て就職したい人が多いことが分かる。
- ・学年が上がるごとにふるさとに住みたいと思う人が減っている。これはなぜか考えたところ、学年が上がるにつれ、秋田にはない会社、県外に出たいと思う人が多く

なることが分かった。3年生になると自分の夢が決まりつつあり、自分の進路を考え始める。

- ・高校は秋田県内でも大学、専門学校、就職は秋田県を越えた他県を含めて考えたい傾向にあるようだ。

Q1：皆さん2年生ですが、就きたい職業は決まっているのか。

県庁など公務員の仕事に就きたい。

Q2：避難所開設訓練を実施してみて、今後必要と思ったことは何か。

(校長先生が回答)

8. 校長先生から質問へのコメント

避難所開設訓練については、昨年度行い、地域の方々と一緒に計画的に行っているため比較的スムーズにいった。これまでは、避難訓練を3時間目にやるといった実践的ではない想定で行っていたが、なるべく実際の場合を想定した訓練になるように「こうした時におきると大変だ」「ここでおきると大変だ」という場面を設定して実践的な訓練を実施した。

それから先程質問があった子ども達の職業という内容も含めて話すが、4月21日に秋田県の人口が100万人を下回ったというニュースがあった。4年連続人口減少率が1位となっていたので、時間の問題と言われていたが、私自身大変ショックであった。

一番の原因が若者の県外流出が深刻であること。また進学で県外に出た若者が帰ってこないことがあげられる。この記事が出たときネット上では、「仕事がないからしかたがない」「空気がおいしく、お米もおいしくても自分の好きな仕事がないから県外に行くしかない」といった書き込みが多くあがっていて、就労場所の少なさ、賃金の少なさを訴える声が多くあった。

今日の生徒の発表にもあったが、地域の良さは十分に認めつつもやはり自分の希望する職業の観点から2割の生徒が県外就職を希望している。4割の生徒が県外就職の可能性があると答えている。

3年生を対象にどんな仕事に就きたいかというアンケートをとった。その結果、県外に行きたいという回答では「自動車関係の大企業」「機械関係の大企業」「医療関係の大きな施設」「最先端技術の産業」「ゲーム製作関係会社」というのがあり、女子生徒では「キャビンアテンダント」「アパレル企業」というのもあった。

仙北に住みたいという意見の職業で一番多かったのがやはり「公務員」13人、次いで「看護師」「警察官」「建築士」「保育士」「農業関係」となっている。

あくまでも仙北中学校の生徒の希望として、この後のグループワークでの参考にしてほしい。

9. グループワーク発表の要点

①グループ「安全安心に住み続けるために日頃からできる防災対策とは」

○避難場所の問題を考える。

- ・ハザードマップの内容をわかりやすく住民に周知する。
- ・地域での声かけ等によりつながりを持ち、高齢者などの災害弱者を誘導する。
- ・避難場所となる施設のトイレを洋式化する。
- ・いざという時に必要な物が揃っているように避難場所の備品をチェックする。
- ・避難しようとしたが、水が来ていて避難場所に行けないということもあり、避難経路の確認が必要である。
- ・まずは防災対策として何をするかと考えたところ、中学校の防災訓練がいい例のように、地域の方々と一緒にどのような活動が必要でどう動くかという計画を市主導で話し合いを進めて決めていき、住民の防災意識を高めていく必要がある。

②グループ「安全安心に住み続けるために日頃からできる防災対策とは」

○地域として防災意識を持ってもらうにはどうするか。

- ・集落で日頃集まる場所やゴミ集積所を活用して、ハザードマップや避難場所をもっと大きな標示にして普段から目に付くような場所に掲示する。これにより自分の避難場所を知ることができる。
- ・難しいとは思いますが、できる限りのことを災害予防組合単位で訓練してもらう。
- ・周知するために地域のカレンダーに、ハザードマップのような防災関連の情報を掲載する。
- ・夜間の通学路を明るくして、歩行者の安全を確保する。
- ・仙北中学校で実施したヘルメットの着用で、夜間を考えると反射材をつけることでさらに安全性が確保される。

③グループ「安全安心に住み続けるために日頃からできる防災対策とは」

○家庭でできること

- ・災害に関する内容、例えば災害グッズがどこにあるのか、火災報知機がどこにあるのかなどを家庭内でも話し合い、情報を共有する。
- ・最低1年に1回は災害グッズの確認をする。
- ・出かける時に行き先や不在となる旨を家族に伝える。
- ・災害を忘れない。

○地域でできること

- ・普段のコミュニケーションとして、あいさつがあげられた。大人より中学生の方

が立派にあいさつできている。あいさつから始まるコミュニケーションは人と人のつながりのきっかけとなり、防犯対策にもなる。隣近所とのコミュニケーションにも有効と考える。

- ・災害に備えて、自治体、消防団が日頃から気にかけて住民へ声がけをする。
- ・また、住民も日頃から危険カ所の確認や改善策の提案などをする。
- ・こういった人が増えることで災害への対策が進む。

○秋まつり等での災害体験コーナーの実施

- ・実際に災害の状況を体感してもらい、身近に感じてもらう。

④⑤グループ「中学生が住み続けたいと思う内容をどう活かすか」

○自然の豊かさをどう維持するか。

- ・10年後、農地を放棄しなければいけない状況になるかもしれない。
- ・空き家、後継者問題に関係してくる。この状況について話し合った。
- ・このままでは自然の豊かさを維持していくのが難しく、解決策は出なかったが、この現状を理解するために、小中学校でキャリア教育、社会科の学習などで農業の専門家を呼んで、喫緊の課題に直面している状況を話してもらい機会も必要。
- ・小中学校の授業で農業について取り上げているが、学校では専門的なノウハウがないため、農業のコーディネーター的な役割を担う機関があればよい。農協のアグリスクールなども有効に活用して農業の担い手づくりにつなげたい。
- ・横堀小は114名いるが、1名だけ農業を継ぎたいという子がいた。後押ししていききたい。
- ・文化財を維持発展、向上させつつ、地域内の伝統芸能の掘り起こしが大切。
- ・横堀小では、堀見内ささら保存会と連携し、堀見内ささらという地域の良さに触れる活動を進めていきたい。
- ・総括として都会にない住みよさ、家族と住めるという強みを伸ばし、農業の6次化などと合わせた取り組みが有効ではないかとの意見があった。

⑥グループ「中学生が住み続けたいと思わない、迷う内容をどう改善するか」

- ・地元の企業の仕事についてもっと知ってもらう必要がある。実際の仕事の内容や数をどれだけ分かっているのか不明であることから、もっとアピールが必要。
- ・問題点として、「仕事が少ない」「仕事に魅力がない」「仕事の収入が少ない」といった内容があげられた。
- ・農業を中心に話したが、現在米が主流となっている中、それ以外の作物の栽培も有効になってきていることから、他の作物でも「収入を増やせる」「楽しい」というところをPRしていく必要がある。
- ・思わないの内容で「遊ぶ場所がない」とあるが、実際に子ども達が求めている遊

び場とはどういうところなのか。具体的な意見を聞いて設置の可否を検討する必要がある。

⑦グループ「中学生が住み続けたいと思わない、迷う内容をどう改善するか」

- ・中学生に対して、今は夢や理想を描いていると思うが、これから生活のために自分で汗を流すことでいろいろ変わってくる。
- ・都会に行きたい人を止めることは無理である。しかし、若いときは外に出て仕事を見直すことも大切であり、良い経験になる。
- ・鮭のように地元を出て、いっぱい学んで力をつけて、地元に戻ってきて今までにない立派な仕事をしてもらいたい。
- ・農業法人をさらに大規模化し、仙北ブランドを確立して農業を発展させていくことが地元のためになる。
- ・都会と田舎では所得も経費も違う中で、お金だけを求めているのではないか。自分の力や心の豊かさを養う教育が必要である。
- ・都会から来る大企業や起業家の居住として空き家を有効利用すべきである。
- ・今までのネガティブな考え方ではなく、かきや銀杏など今まで考えられていなかった自然のものを活用した名物の創出も可能である。
- ・高齢者が住みたくくなるような、また力を合わせて活躍できるような仙北にしていきたい。
- ・中学生に提言として、都会はたまに行くのが楽しみである。

10. 壇上者からの意見

■大山議員

- ・7月の大雨で大曲の金谷が1時間に51mm、協和の境が52mm、一日で364mm降っている。これを基準に天気予報を見ると参考になる。
- ・災害の種類によって避難する場所は違う。災害が終わった後の避難所も重要。
- ・年内に仙北地域のハザードマップが配布になる。
- ・避難所もハザードマップも大切であるが、何よりも早い行動が大切である。今回の被害にあった方々に聞くと「あつと言う間に水が来た」と言っている。
- ・中学生の意見を聞いたが、今後高校卒業する時になるとまた変わる。来春大曲仙北の高校8校を卒業する生徒が約1,000人の予定であり、ハローワークのアンケートでは630人が進学希望、残りの370名が就職希望でその7割が地元で働きたいと答えている。
- ・この声を叶えるため、市長は首都圏へ行き、企業誘致のお願い等をしている。仙北地域に来たアゼアスの本社にも議員が行ってお願いしてきた。みんなで努力することで企業が来て、働く場ができ、収入が得られるという好循環を生む企業誘

致を進めていきたい。

- ・今ある企業はもっと発展して雇用してもらい、さらに新たな企業を誘致し雇用を拡大したい。

■佐藤議員

- ・住みよさランキング36位という話があったが、主な基準となるのが、「子育ての環境」「住環境」「雇用環境」である。他地域からの移住もあるが、そこにいる人々が代々受け継いでいくことが地方では必要である。
- ・10年後、20年後には全国の労働者の約46%が必要でなくなるという統計が出ている。さまざまな企業でコストカットのため努力しており、身近な例としてはスーパーのレジ係がいらなくなるということだった。
- ・若い世代には、⑦グループの発表にあった鮭のように外に出て力を蓄えてまた戻ってきてほしい。
- ・仙北地域は、平坦な地域で災害が少なく、田畑が1,000町歩あるが、非常に整備されており、これを活用した独自の地域ブランドの確立、例えば「仙北池田米」という名前で売り出すなどが有効だと考える。

■本間議員

- ・中学生は都会へのあこがれが強い一方で、3年生になると「仕事がない」「将来に不安だ」と現実的に捉えている。
- ・さらに、ここに残りたいと思う子が少なくなっている。この原因は両親、祖父母が「自分達は自分達で生活するから、どこにでも行って自由に生きろ」と話している家庭が増えたこと。これにより農村社会が変わってきている。
- ・これを聞いている子どもは惰性的に残らない方向へ向かっていると思う。
- ・よく農業は間に合わないというが、ほとんどの人が水稻を作っている。儲からないとやるわけがない。
- ・大潟村は人口が減らず、そこの農家は普通の農家の10倍くらい収入がある。これが見据えるべき農家の将来像だと思う。
- ・岩手にあるトヨタ自動車の工業団地は、50年も前から誘致を進めてきてようやく実現した。企業誘致は、10年20年の期間で進めていかないといけない。
- ・子どもを伸び伸び、生き活きと育てるのも大事だが、父親と母親、祖父母を含めて地域全体で地域をどうすればよいか検討する時期にきており、これが地域づくりの原点である。

■池田泰久氏

- ・プライバシーに配慮した上で集落内で隣近所を見守る体制をつくってほしい。

- ・若い世代には都会で2時間もかけて通勤し、深夜に帰ってくる。こういった生活が豊かなのかももう一度考えてもらいたい。給料の多寡ではない。
- ・少子高齢化はどうしても進んでいくが、交流人口をどう増やしていくかが、この地域にとって必要なことである。
- ・旧池田氏庭園の秋の公開時に約1,000人の外国人の方が来ている。また、黒湯温泉に宿泊した外国人が850人と外国人観光客がどんどん増えている。
- ・来年以降、秋田港にクルーズ船が来ることになっていて、一度に2,000~3,000人の客が訪れてくる。その人たちをどうやってこの地域に足を運ばせ、お土産として何をどう販売するか、それが我々企業の努力次第で売上が上がることにつながる。若い人の起業も課題となっている。
- ・農地の問題であるが、リバースモーゲージという方法がある。公的機関に住宅土地を担保にして一定の融資を受けて、所有者が死亡した場合は住宅土地を公的機関に返還するというもので、この制度を使って使用しない土地は市へ、農地は農協へ、そして集約する。農地であれば大規模農地として信託し、会社を起こさせることも可能だと思う。

■原喜孝組合長

- ・今回の話として、農業の問題、課題がこんなに出てくると思わなかった。この地域の方々はずごく農業に関心を持っていることを改めて感じさせられた。
- ・来年から農業の形、大枠が変わり、50年近く続いた減反政策が終わり、国よっての配分がなくなる。これにより出荷業者や生産者が自己責任で需要と供給のバランスの中で米を作付けすることになる。また、直接支払いの7,500円がなくなり、別の補助金としてまわることになる。
- ・都市部の方は農業にばかり税金が手厚く保護されていると話す。米も含めて食糧の安全保障からするとこれくらい手抜きの国はない。
- ・アメリカもEUもどこの国でも自国の食糧は自国で守ることが大前提である。
- ・今後は飼料米なども輸入せず、自国で生産し、自分達の安全保障を守る。
- ・10月にアメリカへ視察に行ってきたが、アメリカの農家も後継者不足であり、今は大卒の方々がチームを組んで運営している。アメリカでは一坪単位で肥料の濃度計算をしている。日本の農業もこれからは「感」とか「根性」ではなく、データ化されてくる。
- ・道路の路肩に草が一切なくしっかり管理されており、良かった。仙北地域は各方面から行き来する道になっていることから、道路の路肩の草をきれいに刈り、「仙北はきれいだな」というような魅せる地域、こうした付加価値をつけることもできる。
- ・若干不便な地域が良い。秋田を売り込むには少し不便なところを体験してほしい。

こうした取り組みはオリンピックの後のインバウンドの観光客にもインパクトがあると思う。デメリットをメリットとして捉えることが大事。

■佐藤副市長

- ・仙北地域の未来を語る会は、地域を愛する皆さんの意見交換の場であり、他では行われていない取り組みですばらしいと思う。
- ・子どもが誇れる大仙市にしたい。住みよさランキングが高い大仙市であるが、まず住んでいる私達が実感できるように皆さんと取り組んでいきたい。
- ・本日の皆様からいただいたご意見を今後の市政運営に反映させるとともに、どのように実施していったらよいか、皆さんと一緒に考えていきたい。

■早川会長

- ・今やれることを家庭からスタートし、家庭でできないことは各地域で住民の皆さんが話し合いをし、一つの集落でできない場合は、複数の連携が有効と考える。
- ・人口減少が進む中、これからも人が必要となっていく状況であり、大仙市の人口については大山議員からも話があったが、日本の人口ではH29の上期では、毎日2,669人生まれ、3,573人が亡くなっている。差し引き904人が減っていて、年間にすると33万人と秋田市規模の人口が減少していく。
- ・今住んでいる私達がなくなったものを悲しむのではなく、今あるものを育てて増やすことが急務である。
- ・今日の会の内容を集落に持ち帰って、防災活動や若い人達の意見を伝えていただき、集落を盛り上げていただきたい。

■中学生3人からの感想

- ・今回の会を通じて、地域のことを知ることができた。
- ・これからは中学生一人ひとりが自ら積極的に地域の魅力を見つけていけるように心がけていきたい。
- ・職業のアンケート結果については、生徒はまだ大仙市にある会社を良く知らなかったり、理解していなかったからの結果だと思う。
- ・農業については、技術の授業として1、2回くらいしか受ける時間がないので、農業の大切さについて理解できていないと思った。
- ・地域の職業について、もっと理解を深めることが大切だと感じた。知る機会があれば意識が変わると思う。
- ・改めて考えると私達がこの仙北地域で生活できるのは、今の大人の方々が住み続けてくれているからなので、もう少し仕事について調べるなどもう一度良く考えてみたい。

- ・生徒会で話し合い、ヘルメットの着用を行ったが、反射板などを付けることでもっと生徒の意識が高まると思った。
- ・大人になった時、災害が起きたらハザードマップなどで避難経路を把握し、いち早く避難できるようにしていきたい。
- ・私達が秋田で過ごせているのは、秋田の農家の方々が汗を流して米や野菜などを作ってくださっているからだと感じた。自分達が大人になったときに⑦グループの発表であったように農業法人を大きくし、発展させていきたいと思う。

■吉田地域協議会会長

- ・子ども達は、発表の時と比べると大分気持ちの変化があったのではないかと感じた。
- ・さまざまなグループから発表があったが、大仙市が目指している自助・共助・公助にまとめられると思う。やれることは、まず住民自らが行き、できない部分は住民同士、住民と行政、またはコミュニティの中で行い、行政が行うべきところはお願ひしていくことで、若い子ども達に安全安心な地域を譲ることができると感じた。

1 1 . 添付資料

- ・当日資料（決算書、プログラム、講演資料）
- ・写真